徒然草

兼好法師

神無月のころ

神無月のころ、といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ることはべりしに、はるかなるの細道をみ分けて、心細く住みなしたるいほりあり。木の葉にうづもるるかけひのしづくならでは、つゆおとなふものなし。に・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

－34－

もみぢ

かくてもあられけるよ、とあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなるの木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかば、と覚えしか。